
こえのおうじさま！

いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こえのおうじさま！

【Nコード】

N5897Z

【作者名】

いつき

【あらすじ】

兄の友達王子様のような人だったー！。

もうそんな記憶すら掠れかけたある日、彼女はその王子様と再会する。

え？まさか、大人気声優って、王子様！？

きっと甘くなります。 R15は念のためです。

夢のような恋愛がしたいときに。

おうじさまとの出会い

兄の友達は、王子様みたいな人だった。

『はじめまして、柚ちゃん』

真っ黒な髪は柔らかそうで、耳にかかるほどの長さ、前髪は左目にだけ少しかかっている、襟足が肩くらい。黒縁の眼鏡は弦がオシャレにチェック柄。涼しげな目元はいつも浮かべている微笑のおかげで、優しくて、イケメンと噂される(らしい)兄よりもずっとカッコいい。何よりも声が、ほっと落ち着くようなのに色気のあるテノール。これが王子様か、と私は目がキラキラした。

『は、初めまして。吾妻柚希です』

『ゆずき、なんだ。理希がゆずきゆずき言うから、柚ちゃんだと思ってた』

しかし悲しいかな、ここまでの度が過ぎたイケメンは観賞用にしか見えない。クラスメイト達ときゃーきゃー騒いでいた方が楽しいだろうなあなんて思いながら、私は冷蔵庫の中身を思い返す。今日は父が夜勤だ。

『あやちゃん、遊びに行くの？晩ご飯いらない？』

母は、物心ついたときからいなかった。だから家事は私の役目だ。父と兄はたった一人の女である私を溺愛しているようだが、あまり家事は上手くない。私が家庭科の授業を受けるようになってからは、吾妻家の台所は私が預かっている。

『あー柚、カラオケ行く？』

『え？カラオケ？』

『ん。柚一人にしたいくないしね』

『えーとあやちゃんの友達は？』

『俺？一緒に来たらいいよ。理希^{あやき}と2人は飽きるほど行っ^たし』

『堯葵^{たかき}のアニソン熱いからさー』

なんとこの王子の名前は”たかき”と言うらしい。”ゆずき”あやき”たかき”……うーん”き”だらけだ。

『じゃあ行こうかな？お父さん夜勤だし』

『久々に柚とカラオケー』

『恥ずかしいからやめて』

『割りといつも通りだから大丈夫』

クスクスと笑う堯葵さん。いつも通りとはどういう事だろう。もしやうちの兄は彼の前でもシスコン全開なのか。なんたる事だ聞いている。

『なんかこう……兄がいつもすみません』

『理希から柚ちゃんの話ずっと聞いてたから、初めてって気がしない』

『で、出来れば兄の話は忘れてくれると……』

『いやー無理かなー。見たことない柚ちゃんが夢に出るくらい聞かされてるからね』

それは大変な悪夢だ。平謝りしながら、兄の手を引く。先程からこのシスコンの兄は手を離してくれない。彼女だっている癖に、事ある毎に私を優先するものだからつられているのだ。兄の大学では、私はのび太くんに対するジャイアンのように高い壁らしい。いやいや、ジャイアンだって劇場版ではのび太くんを助ける良い子だ。手助けは惜しみませんとも。

『大学で悪評が立つわけですよ……』

『うーん、否定は出来ないけど、俺は柚ちゃんが良い子って知ってるし』

『え?』

『あの討論会では怖いくらい理知的な理希が骨抜きだしね、話に聞いていると柚ちゃんがワガママ言ってるんじゃないかって理希が言ってるんですよ?』

そつなんですよ!あのワガママ放題の兄にこんな素敵なお友達がいるなんて!私は感激のあまり、兄の背中を叩いた。

『お友達マジいい人。仲良くしなきゃダメだよあやちゃん』

『堯葵でいいよ』

『はあ？ 柚もコイツの王子キャラに騙されたの？ ダメだよ、柚は柚だけを大事にしてくれる奴じゃないと』

『理希、人聞きが悪い。柚ちゃんに誤解させないで』

『特定の奴を作らないで愛想振りまいてるだけじゃないの』

『そんなんじゃないよ』

『俺は全員に思わせぶりの態度をする方が罪だと思うけどね』

なるほど。性格面でも王子様なのか。そりゃあモテるわ、モテオーラ漂ってるもの。感心しながら堯葵さんを見ると頬を染めている。

『あの、堯葵さん？ 私はその堯葵さんのこといい人だと思ってますし！ こんなあやちゃんと付き合ってくれるだけ王子とは言わず王様ののような懐の深さを感じるし、それはマリアナ海溝より深いと思います』

『マリアナ……ぶふッ』

しゅんとしていた堯葵さんを慰めると、笑いが返って来た。マリアナ海溝がツボに入ったらしいのだが、残念ながら私はマリアナ海溝の深さがどれくらいか知らない。思ったより浅かったらどうしよう。

『マリアナ！ 関係ないよね、マリアナ！ あはははは！』

爆笑された。彼は美貌と讃えられるような相好を崩しまくり笑い出す。

『こいつの王子キャラっぷりはヤバイからねーアニメが大好きなのに微塵も見せずに趣味はドライブとか言っちゃうからね』

『ドライブも趣味だよ』

『私もアニソンとか好きです。赤荻亜希とかライブ行く位ですし』

『赤荻亜希いいよね。柚ちゃんはアニメとか見るの?』

『あんまり詳しくないんです。亜希ちゃんが声優してるやつは見たりするんですけど、後は友達に勧められた奴とか』

『そっか。じゃ一緒に赤荻亜希歌おう』

『おい、堯葵?俺の許可無しに柚を誑かさないでくれる?』

カラオケ前で兄が堯葵さんに喧嘩を吹っかけた。一緒に歌うくらいいいじゃないか、滅多にこんなに王子様のな人と歌うなんて出来ないのだから。すると堯葵さんも負けてはいない。

『何で理希の許可が必要?』

『何で必要じゃないと思うの?』

これは間違いなく兄の方が理不尽なことを言っている。何故妹とのデュエットに兄の許可を得ねばならないのだ。

『理希。俺決めたよ。もうそういう偽りは無しにする。俺は自分の夢を追いかける。目下の目標は柚ちゃんが知るレベルになること』

『それはいい事だと思うけど……まさか』

『私がどうしたんですか?』

何故私の名前が出て来たのだろう。知るレベルってもうお知り合いにはなれたと思うのだけど。私の傾げる頭を撫でて、堯希さんは微笑んだ。

『俺ね、ちよつと無理してたんだけど、……柚ちゃんに会えて良かった。楽になったよ』

『よく分らないですが、堯葵さんが楽になれて良かったです』

この後兄が頭を撫でたと堯葵さんに詰め寄ったり、彼とカラオケで一緒に亜希ちゃんの歌を歌ったりした。堯葵さんは恐ろしくうまかった。天は二物も三物も彼に与え過ぎである。

兄が大学を卒業する迄は、堯葵さんとよく三人で遊んだと思う。彼と兄と赤荻亜希のライブに行ったときは、私はサイリウムを50は折った。それを楽しげに一緒にやってくれたのだから、本当に堯葵さん……いや堯葵くんは王子様だ。そう、丁度その頃”親しい呼び名にしよう”って提案されて、くん付けになった。兄は不服そうな顔をしていた。

私はその後兄を追い掛けるように同じ大学に入ったが、兄や堯葵くんは4年になって大学に来ていなかった。兄は弁護士になる夢のため、堯葵くんも夢のためらしい。この頃は時々メールしていた。彼のメルアドは”マリアナ海溝”が入っている。よほどツボだったのだろう。彼らはやはり凄まじい人気だった。まあ私も先輩に聞いただけで詳しくは知らないのだが、彼らが食堂にいるだけであのデカイ食堂がいっぱいになって行列だとか。嘘みたいな本当の話らしい。

私にとっては堯葵くんは観賞用王子様で、兄はちょっとウザい兄だった。王子様と恋愛する気はさらさら無い。だって王子様を追い掛けている女子たちはコワイのだ。芸能人じゃなくてなまじ近くに
いるから、我先にと昼休みのパン争奪戦レベル。そこには割って入りたくない、入れないし。

兄が忙しくなつて、私は堯葵くんと疎遠になった。彼も社会人だ、忙しかろう。そんな風にして、私の中の”堯葵くん”は王子様のまま、伝説になったのである。??

????2年後。

「柚ー！おはよー」

「おはようー」

ニコニコと嬉しそうな友人に連れられ、某イベント会場にいる。周りには浮き足立った女の子たちがきゃいきゃいと今日のイベントに向けて逸る心を思い思いに語っている。

「タカの単独イベント待つてたんだよー！」

「あれ、あれ聞いた？ささやきのヤツ！」

「聞いたーッ！超かつこ良かったー！」

「握手できるとか！間近でタカ見たら私死んじやうかも！」

すごい人気だ。”タカ”は。

私は浮いてやしないかとキョロキョロした。

「袖どうしたの？」

「なんか、ファンクラブじゃない私が浮いちゃいないかと思って…」

「大丈夫ーだって付き合ってもらってるの私だしね」

友人の麻衣子。私を赤荻亜希オタクというならば、彼女は声オタク…つまり声優好きである。大学に入ってから連むようになり、声優の布教を受けているが、最近は彼の事しか話していない。

若手の声優、タカ。タカというのはいわゆるあだ名で、本当は”ユカワタカキ”という。なんでも物腰は王子様を体現したようなあり得ない人らしい。ちなみにあり得ないというのは私の感想である。タカについては二年くらい前にデビューして、脇役から今や何本もレギュラーがあつて主役も張っているとか、あまりそちらには詳しくない私でも凄いと思う声優だ。

今日はファンクラブのイベントで、その中でも握手が出来るのは選ばれしファンのみとのこと。この隣にいる麻衣子もその一人であるが、一人が心細いというのでついて来るだけついて来た。握手権はないので眺めるのみになるが、声優のイベントに行くのは初めてなのでそれなりに楽しみである。

物販で”こっからここまで全部！”と息巻く麻衣子は、赤荻亜希ライプの私のような。私は全部！の他にTシャツは2枚は買う。近頃

のサイリウム数はついに80くらいまできた。ウルトラオレンジがドームで輝く様は綺麗なのだ。

開場時間には、もうこの会場に入るのかというくらいの子がいた。中学生とかもいるのではないか、みんな彼の為に来たのだろうからやはり、彼の人気はすごいものである。

入場し、オールスタンディング。熱気が凄い。ライブの前のこの時間は、ドキドキして興奮してしまう。これからめくるめく素敵なものが始まるというワクワクが込み上がって緊張する。

フツとライトが消えて、ジングル。次に歩いて出て来た人を皆が見た瞬間、大熱狂の声が上がった。

『こんにちは、お集まりいただきありがとうございます。湯川堯希です』

声がすごい。スタンディングのせいで前が見えない。割りと泣いてる声とか聞こえている。隣にいる麻衣子も”キヤータカーツ！結婚してーッ！”などと勝手なことを泣きながら叫んでいた。私も赤荻以下略。

でもいい声なのは分かった。私は舞台を見るのを諦めて近い方のモニターを見る。

……もつと寄ってくれカメラ。王子様が見えない。

『今日は皆さんに会えて嬉しく思います。歌とかも歌わせてもらう予定なので、聞いていただけたらなーと思います』

「タカーツ！タカの歌！ねえ柚、タカの歌凄いいんだよ！」

「ほうほう、でもいまだにタカが見れて無いんだけど私」
『実はさっきまでレコーディングやってて……あ、これまだ言っちゃいけなかったんです?』

ボケをかまして場が湧く。CDを出すよってことを前倒しで発表しちゃったようだ。

「買う!保存用とインテリア用と舐める用と抱いて寝る用と布教用2枚買う!」

それは買い過ぎだ。用途が得體知れなさすぎる。舐める用は衛生的面でやめた方が良くと助言したい。
それにしても、字面に覚えがある。ユカワタカキって私の携帯のメモリーに入ってたっけ?頭のメモリーは呼び出させてくれないうのだが……。

(王子様……王子様……)

?? 柚ちゃんに会えて良かった。??

「あ」

ふと脳裏を過る、思い出。私の中の王子様。

(でも字が……)

あの人の下の名前の字は堯葵だったはずだ。私や兄と同じ希ではない。

疑問に思いながらも見上げるモニター。

瞬間、カメラが寄り、大人気声優”湯川堯希”を映した。

「ッ！」

時間が止まったみたい。いや相変わらず凄い黄色い声は聞こえていたのだけど、どこか遠かった。

?? 真つ黒な髪は柔らかそうで、耳にかかるほどの長さ、前髪は左目にだけ少しかかっている、襟足が肩くらい。黒縁の眼鏡は弦がオシヤレにチェック柄。涼しげな目元はいつも浮かべている微笑のおかげで、優しくて、イケメンと噂される(らしい)兄よりもずっとカッコいい。何よりも声が、ほっと落ち着くようなのに色気のあるテノール。

私は、この人を、知っている。

リフレインする”堯葵くん”の声。私を、呼ぶ声。

「麻衣子……私知ってる」

「え？」

「……この人、堯葵くんだ……」

ほんとにおうじさまはあなた？

湯川堯希。プロダクションセブンコード所属。6月25日生まれのかに座。現在25歳。身長183cm、体重68kg。代表作は「Analyze」主人公トーマ役？。

麻衣子から奪ったリーフレットのプロフィールを読み、再び目の前の王子様を見遣る。本人そっちのけで僅かな光源を頼りに食いつくようにリーフレットを読んでいるのは私くらいであろう。

柔らかな微笑を湛えている彼は、司会らしき人間と質問コーナーの最中らしい。どこかで見たテレビ番組よろしく、箱から紙を引いてそれに書いてある質問に答えているようだ。

「じゃ次です！休みの日は何をしていますか？」

「オフ……そうですね……家事に費やしたり、ゲームしたり、ケンさんとカラオケ行ったりです。こないだは友人とボーリング行きましたよ」

「ボーリング！ちなみにスコアは？」

「結構調子良くてハイゲームは200アップでした。アベレージ180くらいですね。次の日筋肉痛でアフレコ大変でした」

いつだったろうか。少し前、兄が悔しそうな顔で帰って来た日があった。"あいつは化け物か、アベレージ180とか"なんて零した次の日、筋肉痛でベッドで寝込み、マッサージをさせられた。アベレージ、なんて言うからボーリングに行っただろことは勘付いていたが、まさか……いやいや。

『次です！今欲しいものはなんですか？』

『ドライブが割りと好きなので、車ですかね。一人暮らしまでは親の使ってたんですけど、維持費がかつちゃうから中々買えなくて…』

『…』
『都内だと車なくても移動には困りませんもんねー！はい次引いてくださいー』

『はいはい、えーっとどれにしようかな……これで』

『はい。……好きなものはなんですか？』

『皆さんご存知かと思いますが、甘いもの。ファンレターで教えてもらったケーキ屋さんとか行ってるんでまた教えてくださいね』

『そういえば、堯希さんの携帯のストラップって……そうそうそれ。マカロンですよ？』

ちらり、と舞台端から携帯を持った手が出て来る。笑って受け取った彼の手にカメラが寄った。"タカ"の携帯に会場が沸く。スマートフォンの中でも分かりやすい機種に揺れるストラップは黄色の丸いマカロンを象ったものだ。お揃いにでもしたいのだろうか、麻衣子を初めとした周りのファンたちは、あのマカロンストラップがどこの店のものかと囁きあっている。

「あー！あのストラップどこで売ってるんだろー！？」

「……………紅茶のおまけだよ……………」

「へ？」

あれは、ミルクティーについていたおまけである。確かどこかのマカロン屋さんとのコラボで、何種類かの味のものがあったと思う。

私は本物は柚味だという黄色のおまけを選んだは良いが付ける所がなく、欲しいと言った堯葵くんにあげたのだ。その後、堯葵くんは本物の柚味マカロンを買って来てくれた。非常においしかった。

（いよいよ、あれは堯葵くんだ……）

彼から言葉が紡がれる度、ひとつひとつ裏付けられてゆく。私の脆弱な記憶から、鮮やかに蘇る。

『柑橘系とかも好きですね、オーデコロンとか、そういう匂いばかり選んじやいます』

『乙女たち、メモはバッチリですか？今日も堯希さんは良い香りですよ』

なんと煽りの上手い司会者か！乙女たちが頬を赤らめてうつとりしている！

『さて乙女のための質問コーナーもこの質問で最後です。はい、ありがとうございます。読みますね。えーっと……おおっ！これは！乙女たちの最も関心ある話題！』

王子様が渡した紙を開いてオーバーアクション。なるほど、声優湯川堯希にファン感情を超えた恋愛感情に近いものを持つ乙女たちにとって、この質問コーナーは意義深いものであろう。好きな人のこ

とはたくさん知りたいものだ。現に麻衣子なんて熱心にメモを取っている。何に使うのか。

『タカは彼女いますか？デートならどこへ行きますか？ほらほらほら！来ちゃった遂に！みんなちゃんと聴かなきゃだよ！ていうかこれ質問二つじゃない！？』

高度にパーソナルな質問だ。いやこんな王子様に彼女がない訳なかろうて。

『あははははは、確かに二つですね』

『さあ乙女たち心の準備は良い？堯希さん。公明正大に！神に誓って真実を述べてください！』

静まり返る場内。軽く流れていたBGMさえ止まっている。モニターの中の王子様はそれに驚いたようにしながらも薄い唇を開いた。

『じゃ一つ目は……残念ながいけません』

「「「きゃー！」「」」

『聴いたか乙女たち！おめでとう乙女たち！……ところで嘘でしょ。モテモテでしょ。僕が女ならコロツですよ』

『あははは、神に誓って。モテないんですよこれが。友達曰く”愛想振りまき過ぎ、俺の一途さを見習え”とか言っんですよね』

『面白い友達ですね、一途なんですか』

『彼はシスコンなので、彼女によく”妹と私どっちが大切なのよ！

” つてフられてますね。根は真面目な弁護士なんですが
『それは一途じゃないかと』

それは吾妻理希とかいうお名前の方ではないでしょうか。兄で会場が笑いに満ちている。なんだか恥ずかしくて頭を抱えなくなった。こんなところまで出張してくるとは兄よ。

『デートはそうですね。ドライブもいいですがスイーツ巡りとか…
…あ、男らしくないかな』

『いや世は草食時代ですよ。女の子だってスイーツ一緒に食べてくれる彼氏が良いですよ！ね、乙女たち！』

そう司会が客席に振ると、良い！の大合唱。一部（主に隣の麻衣子様）は”タカなら何でも良い！”と言っていた。それはどうかと思います。

『俺草食の心算はないんだけどな』

肉食でもOK！のレスポンス。おっとタカなら何でも良い派が思ったよりいるらしい。

司会さんが上手い感じで締めて、質問コーナーは終わった。少しの幕間、衣装変えか乙女たち（感染った）の話し声が聞こえる。

「柚ー！どうよどうよ、私のタカ！」

「麻衣子のなの！？敵を作るよその発言！」
「どうせ皆そう思ってるのよ。タカに愛して欲しい……その前に認識されたいッ」

通りで皆様思い思いに気合が入ってらっしゃるのか。私は普通の格好で場違い感ハンパないのですが……。
すると、余計にここで迂闊な発言は出来ない。

「あつ始まる！」

会場が薄暗くなり、第二部が始まる。第二部はライブらしい。リーフレットが手放せない私はそれを見て、王子様に視線を戻す。
彼は三曲を歌い、乙女たちは興奮しうつとり泣いていた。私はサイルウムを振りたくなった。すごいいい歌ばかりだったのだ。
麻衣子もご多分に漏れず泣いている。ボロ泣だ。このあと握手会なのに大丈夫かと心配してしまうほど涙を零している。パンダお化けになってないことを祈るばかりだ。
堯葵くんの歌は、前に聞いたときより進化していた。前だってそれはそれは上手かったのだが、今はそれどころではない。何故歌手じやないのか疑う。胸の奥をざわつかせるような、ふと、泣き出したくなってしまふような、かと思えばいつも傍にいるよと抱き締めてくれるような。私は一気に堯葵くん？？否、湯川堯希のファンになつてしまった。

歌の最後に彼はライブやります、とまた爆弾を落として行ったことで、乙女たちが半狂乱になった。麻衣子は私の肩を掴み揺さぶってくる。何かが出てしまいそうだ。

「ヤバイヤバイ！タカのライブ！絶対行こうね！」
「う、うん。そうだね。じゃあ私予習しなきゃね」

コールとか振りとか……と思ったが湯川堯希のライブに決まったコールも無ければ振りもないだろう。いつもとは客層も違うし自重せねば。浮きまくるぞ。

「あーこの後あれだよ握手だよマジ私鼻血出しちゃうかも！柚はこの後のオフ会行く？もう私自慢しまくっちゃうし！」
「オフ会？」

「うん、タカファン同士の。コミュニティの仲間なんだー6人だけどね、ご飯とか食べるよ」

「それこそファンクラブ会員じゃない私が良いの？」

「え？柚も今日好きになったでしょ？今日入っちゃいなよ」

微塵も”いい特には”という答えが返ってくることを予想していない自信ありげな表情には感服する。実際私は湯川堯希を好きになったし、それは堯葵くんだからではない。彼のパフォーマン스가素敵だからだ。……かと言って麻衣子みたいに結婚したいかと問われれば首を捻るところではあるけれど。

だってどうあがいても彼は声優だ。少し私とは居る場所が違うのだ、見る景色もきつと違うのだろう。現に私は今舞台の彼ではなくモニターの彼を見ている。初めて会った時もそうだったが、今はさらに高い壁があると思う。確実に線引きされた、向こう側が見える透明な壁が。

ついに握手コーナー開始らしい。権利がある人たちが呼ばれてゆく。麻衣子に”鼻血だけは堪える”と役に立たない助言をして、私はどこか遠くからその光景を見た。

「羨ましいー私もタカと握手したかったー」

「触りたいー喋りたいー声かけて欲しいー」

「堯希とスイーツ巡りしたい」

ぽっかり空いた麻衣子がいた空間と逆サイド、握手権がないのだろう乙女らは悲しげに呟く。とどのつまり、湯川堯希に自分を認識してもらいたいということなのだろう。あわよくばそこから恋に発展したいらしい。

それは、とても眩しい。

それくらい打ち込めるものがあるその子達はとても可愛く見える。思えば友達も恋をして可愛くなった。湯川堯希は罪作りな人間であるとともに、乙女たちを可愛らしくする魔法使いなのかもしれない。舞台上の麻衣子が遂にタカと握手をする。念願の触れ合いだろう。彼を鼻血で血染めにしやしないか心配だ。しかしそんな心配は喜ぶべきことに外れて、握手を終えた列に並んでいた。その後全員と握手をした王子は挨拶をして退場。イベントは大成功でお開きとなった。

「あー！タカの手が！優しく私に！あー！」
「……………」

病を発症している彼女は、イベント会場傍で叫んでいる。ここに連れて来てくれた彼女には堯葵くんのことを話そうと思ったのだが、あの発作っぷりを見るとどうしようか迷う。

「タカの指とか細くて、でも女っぽい訳じゃなくてさー！手とか筋張っててチヨーかつこいいの！間近で見てもすっごいイケメンで！ヤバイもうよく私鼻血噴かなかった！」

「そこは褒めとく」

「でしょー？！私すっごい頑張ったよ！夢の世界にいるみたいだった……………」

いよいよタカは魔法使いらしい。さて、私はひとつ決心してメール画面を開く。

「柚ーこの感動を自慢したいからオフ会行こうよー、そのサイズなんだけど」

「ちと待ってね」

マリアナ海溝から始まる変なメールアドレス。件名は”久しぶりです（＝ω＝）”と適当に。

その麻衣子とはまったく違って絵文字より顔文字が多いのは、絵文字非対応なスマートフォンになってから顕著になった。そういえ

ばタカも同じ機種だったなと思いながら本文を打ち込む。

t o 湯川 堯葵

s u b 久しぶりです（〃・ω・）

お久しぶりです。お元気ですか？

今日、友達に連れられてあるイベントに行きました。堯葵くん、声優になったんですね！

とてもかつこ良かったです

「よし送信」

画面のバーが右端まで伸びて、送信完了を示す。そして私は彼女を振り向いた。

「じゃオフ会付き合っ……」

と肯定を返そうとした時、携帯電話が震えだす。

「ごめん。電話」

彼女に再度そう断って、私は携帯のディスプレイに視線を落とす。

??着信 湯川 堯葵??

「!」

飛び跳ねるように緑のボタンを押した。

硬い感触が耳に当たる。そこからどこか焦ったような、だのにやっぱり良い声が耳朵を撫でた。

『もしもし、柚ちゃん?!』

「もしもし、お久しぶりですね」

『久しぶり……いやなんて言うか、その』

堯葵くんは言葉を探していた。もしかして、彼が声優であることを知ったのはまずかったのかもしれない。真意を問おうと思って口を開けた私の言葉を遮るように、堯葵くんの声が聞こえた。

『……ごめん取り乱して。思ったより早くて。柚ちゃん。まだ会場にいる?』

「はい、いますよ。会場前です」

『もしこの後急ぎの用事とか無かったら、……会えないかな。楽屋まで来てもらうことになっちゃうんだけど』

「え?でもイベント終わったばかりで忙しいんじゃない?……」

『そんなのいいんだよ、柚ちゃんが忙しければ』

彼が、耳元でクスリと笑う。ふと漏れた吐息の音に頬が真っ赤になるのを感じた。

『俺、今すぐ君に会いたいんだ』

再会のおうじさま

??俺、今すぐ君に会いたいんだ??

(天然なのかな、たらしなのかな……)

背筋にゾクリと何かが走るような声で囁かれてしまえば、頬が真っ赤になるのが分かった。電話で話しているというのに頷いてしまい、堯葵くんにもう一度訊かせてしまったのは内緒だ。まったく天然王子様というのは困る。

「あ、でも友達もいて……」

「俺のこと知ってる人……なんだろうね。あの……女の子……だよ
ね?」

「うん、今日のイベント誘ってくれた子」

「……ん、良かった。なら良いよ、連れておいで。今日の服装教えてくれるかな? スタッフが迎えに行くから……出口で待ってて。ス
タッフジャンパーを着てるから」

帽子を被っているだの伝えて、通話を終える。くるくる回って今日の余韻に浸る麻衣子を振り返った。堯葵くんに会えることになったのも、やはり麻衣子がか……否多少強引に私を誘ってくれたからだし、先程の5分足らずの時間でもこれなのだから、今から楽屋に行きますと言えば喜んでくれると思う。

御礼といっではなんだか恩着せがましいが、彼女がこれだけ湯川堯

希が好きならばと私は彼女に声をかけた。

「麻衣子、そのオフ会多少遅れても良い？」

「ん、いいよ。用事あるなら先に行ってもいいけど」

……例えば先に行ってもらったとして、後で私が”タカ”と知り合
いでしたーなんてバレたら私の生命問題に発展しそうなので、ここ
は選んで貰うことにした。

「それはどっちでも良いけど……えーとね今から」

「失礼します、吾妻柚希さんとそのお友達ですか？」

「はやっ！」

思わず口から本音が零れてしまった。まだ麻衣子様にご説明申し上げ
てないというのに。

「あはは、堯希が早く行けって笑顔で脅すものだから……あつ、こ
ういう言い方してたって言っちゃだめだよ！」

（随分お茶目なスタッフさんだな……）

色々ただだ漏れしそうな人である。こういう人には秘密を託しては
ならない。ちゃんとご挨拶をしてから、再度麻衣子を向き直るとハ
テナマークがたくさん浮かんでいるような表情だった。分からない

でもない。

「えーとね、今から……中に知り合いがいて、湯川堯希の楽屋に行けるんだけど、麻衣子はどうす」

「行く」

「そう仰ると思っておりました」

「今ものすごくあんたを誘って良かったと思っております、柚希様」

こういう彼女の分かりやすい態度は大好きだ。私たちはにこにこ笑うスタッフの後に続いて未知の舞台裏に向かうことになったのである??。

リノリウムの床が靴音を反響させる。舞台上ではスタッフさんたちが片付けに勤んでいた。スタッフジャンパーの秘密がだだ漏れの人は、湯川堯希の事務所の方らしい。

麻衣子は私のコートの端っこを握っている。ドキドキしているのだろっ、どんどん握る力が強くなっていてコートが伸びそうだ。やめてくれ。

勿論私も俄かに緊張していて、心臓の音がちよっとうるさい。身体中の血管が鼓動を増幅している。

「堯希ー。お連れしたよ」

ノックと問いかけの声。このドアの向こうにいるのは確実に堯葵くんなのに、有名人がいるみたいに見える。……いや有名人か。くぐもった声の答えがあり、麻衣子からの引力が増した。転けるので緩めて欲しい。

ゆっくりとスタッフジャンパーさんがドアを開ける。あまり広くはない部屋で椅子から立ち上がった人は、紛れもなく先ほどまで舞台の上で乙女たちに魔法をかけていた湯川堯希、だった。

「柚ちゃん、……会いたかった」

スタッフジャンパーさんに促され中に入る。ドアが閉まった瞬間に、引力が後ろから前へ。するりと私のコートは麻衣子の手から抜けて私は温かな腕の中にいた。微かにシトラスの香りがして、目の前が暗くなる。私の背中や肩を覆う感覚、優しいのに力強い手。驚きで声が出ない私の耳を、心地良いテノールが撫でた。

「やっと、……これで」

「た、堯葵くん？」

「ずっとね、俺……柚ちゃんに会いたかったんだよ」

「え？でも、堯葵くん……私のアドレスとか知って……」

やっと塞がれていた視界が開ける。彼を見上げると、このアングルなのに綺麗に整った顔が嬉しくて堪らないといった風に微笑んでいる。

た。格好良くて可愛い笑顔に、流石に照れてしまう。

「理希が許してくれなかったから。でもやっと、柚ちゃんが俺のこ
と知ってくれた。すごい嬉しい」

「あやちゃん、なんでそんなこと……」

「まあ、それは多分妹を心配してだと思っけど……」

「おい、堯希……吾妻さん？」

突然の男性の声に驚き振り返った。すると居心地の悪そうなスタッ
フジャンパーさんと呆然とした麻衣子。私は血相を変えて堯葵くん
の腕からすり抜け、麻衣子に近付く。

「もしもし！麻衣子さん！」

「知り合いつて……スタッフさんじゃ……」

「実は……その湯川堯希さんご本人でして……」

「……どうして早く言わないんですか？！」

「すみませんでした……？」

よく分からないが怒られたので謝罪。ガクガクと揺さぶられた状態で
魂が抜けそうになる。するとそっと麻衣子の手の上に自分のそれ
を重ねて堯葵くんが止めてくれる。なんという紳士か。

「ああああの私、湯川堯希さんの大ファンで……！」

「柚ちゃんのお友達だよな？ありがとう……あ、さっき握手したよ
ね？」

「はい！その、とっても嬉しいです！柚希とお知り合いだったなんて……」

「そう。……いや待って、もしかして」

堯葵くんが思案するように手を顎にやった。ともすれば気障な仕草なのに、彼がやると様になるから困る。

「柚ちゃんは、彼女に誘われて来た？」

「あ、はい。そうです。って言ってなかったですっけ？」

「ああ……いや興奮して聞いてなかったんだ。そっか……うん。俺もまだまだだってことだね」

そう言って堯葵くんは切なげに笑んだ。それはなんだか悲しそうで、私は言い訳するように言葉を紡ぐ。

「でも、今日堯葵くん、とても格好良かったですよ。歌にも感動しちゃって、アニメも見るしライブも行きます！ファンクラブも入ろうかなって思うくらい」

「理希はルート指定しなかったから……条件は達成、で良いだろうね。ありがとう、柚ちゃん。これからは連絡もするから良かったら遊んでやってね」

にっこりと笑う堯葵くんには、もう先ほどの憂い顔は無かった。条件、とかルート指定、とかはよく分からないけれど、これからも彼と遊べるならそれに越した事はない。

ただ、彼も社会人だ。これまでのようにはいかないだろう。

「勿論！でも堯葵くんも社会人だし、無理はしないでね。休むときは休まない」と

「俺にとっては柚ちゃんと一緒にいられる事が癒しなんですよ」

甘い。甘過ぎる。砂糖菓子に蜂蜜をたつぷり、チョコレートもかけちゃえ！と言わんばかりの台詞にクラクラする。それを紡ぐのがこの王子様フェイスなのだから、堯葵くんは結婚詐欺師の素質があるだろう。

スタッフジャンパーさんが時計を見出した。それを目端で捉えた私は、堯葵くんにそろそろお暇することを伝える。

「そっか、また遊ぼうね」

「えっ！」

送り出そうとする彼の声に麻衣子のそれが重なる。先程一瞬重なった手にドリームワールドにトリップしていたのだが、現実世界に帰って来てくれたらしい。

「麻衣子、オフ会。待たせてるよね」

「あ……うん……じゃああの……堯希さん！サイン、いただけませんか？」

「お安い御用ですよ。どれに書こうか？」

「えっと……CD、とあの、ファンクラブのカードに……」

「CDはもう書いてあるのかな……前田さん」

スタッフジャンパーさんが、テーブルからCDを二枚とサインペンを持ってくる。前田さんというらしい。

「君の名前を覚えてくれるかな？」

「ま、麻衣子です！植物の麻に衣服の衣に子どもの子です」

「うん、ありがとう」

歯で蓋を外した堯葵くんは（その様すら格好良い）、麻衣子から受け取ったファンクラブカードとCD2枚に何かを書きこんだ。

「はい。これからも応援してくれると嬉しいな」

「は、はい！勿論ッ！ありがとうございます！」

「柚ちゃんにも。ファンクラブ入ってくれるの？」

「入ります」

「ん、じゃあ特別仕様のカードを次会うまでに用意しておくね」

「柚ちゃんへ」と「Takaki」のサインが入ったCDを受け取る。どうやら音楽のCDではないようだ。麻衣子が受け取ったものにも、「麻衣子ちゃん」へと入っているのだろう。

いよいよ本当にお暇するとなったときに、堯葵くんは私の頬にかか
る髪を耳にかけて、言付けを頼んだ。

「理希に伝えてもらって良いかな？ 柚ちゃんの口から伝えることが、とても重要なんだ」

「うん、どうぞどうぞ」

「”条件達成”と、”これからは遠慮しません”って」

「はい」

兄にしろ堯葵くんにしろ、遠慮し合うところなどついぞ見たことがないが、それ以上に、ということだろうか。意味は深く考えずに私は頷く。

「じゃあね、またね」

スタッフジャンパーさんがまた出口まで送ってくれるらしい。私はとろけるように甘い微笑みの堯葵くんに手を振って、楽屋を後にした。

行きは絶えずコートを引っ張られていたというのに、カードを見ながらニヤニヤしてしまっている麻衣子のコートを仕返しとばかりに引っ張って外へ向かう。スタッフジャンパーさんは、”これからも堯希をよろしくお願いします”と言って手を振ってくれた。お辞儀をして私はスマートフォンでサイゼリヤを探す。その頃には麻衣子も多少受け答えができる程にまでは現に帰還^{くわん}していて、オフ会メンバーと合流した。

私や麻衣子の持っているサイン入りCDは羨望の的になり、楽屋に出入りしたことを言えば羨望どころか最早何を言われているのか分からないほど興奮された。麻衣子は私が堯葵くん？？湯川堯希の知り合いだということを知っていたはずだが、楽屋に入れる理由につい

ては言わなくてくれた。私はこの子のこういうところも好きである。オフ会をお開きにした時には少し厳しい麻衣子の家の門限にギリギリだったので、麻衣子は”明日授業終わったら覚えてろよ”と不穏なセリフを残して帰って行った。明日は質問攻めだろう。

「ただいまー」
「おかえり」

誰もいないかと思っただが、兄が帰っていた。今日は相談のアポイントだけだったらしく、いつもより早めだったとのこと。

「あやちゃん。ごはんは？」
「食ってきた。よしぎゅー」
「あ、いいなー」

まだ牛井屋に一人で行く勇氣はないので、よく兄に連れて行ってもらうのだが、私と二人となると兄は値の張りそうなレストランに連れて行こうとする。これは父もそうなので、遺産なのかもしれない。

「また今度連れてってやるから。柚は？ご飯食べたの？」
「食べたよ」

こっちへ来いと兄が座ったソファの隣を叩いている。素直に私はそこに座った。大きな手が頭を撫でる。兄はシスコンであるが、これを許す私も多分ブラコンなのであろう。現に私は兄・吾妻理希が大好きだ。

ふと、今日の堯葵くんの手を思い出した。彼の手は兄と同じくらいのおおきさだし、温かさだって変わらなかったのに、あの腕が背中に回って肩に手が触れた時、心臓が跳ねた。ドクドクと鼓動が煩いの

にその手を離して欲しくなくて、拒むこともしなかった。きっとそれを大学の友人にやられたら私は拒否していたろうし、兄に抱き締められてもドキドキなんてしない。

?? 一体、何が違う？

「……ず？ 柚？」

「あ、何？」

「今日はどこ行ってたんだ？ 麻衣子ちゃんとだっけ」

「うん、そう…… あっあやちゃん！」

思考の淵から引き戻されて、私は今日のことを篤と兄に語ってやるうとした。そこで堯葵くんのメッセンジャー役を思い出したのだ。

「堯葵くん、声優になったんだね！ 教えてよ」

「…… まあちよつと色々あってね」

「何それ。あやちゃんが堯葵くんに私とメールするのを禁じていたことはネタとして上がってるのですよ」

「……堯葵に会ったの？ 柚」

兄の真つ黒な双眸が、全く同じ色をした私のそれを覗き込む。どこにもそんな要素はなかったのに、兄の瞳は酷く真剣だった。

「うん。麻衣子が堯葵くんファンで……今日ファンイベントだったの。メールしたら堯葵くんが楽屋に呼んでくれて……そうそう、あやちゃんに伝言があるよ」

「予想がつくよ。……条件達成、じゃないか？」

「何で分かったの……怖い、盗聴？」

「堯葵の言いたいことが分かっているからだよ。俺が出した条件、だしね」

そう言う兄の瞳は、真剣さの他に寂しさを帯びていた。堯葵くんが昼間したように、私の髪を耳に掛ける。

「あと、”これからは遠慮しません”とも」

「はあ？ ムカつく」

ぎゅ、と力を込めて兄は私を抱き締めた。ソファで隣り合っているので、正直腰が微妙に辛い。でもいつもの、私を猫可愛がりするような雰囲気では無いので、静かにそれを享受する。兄の愛はときどきウザったいこともあるけれど、分かりやすく愛してくれていることはとても嬉しい。

「予想外に早かった。麻衣子ちゃんは伏兵だったな……それだけアイツは真剣だった、ってことか。夢にも……」

独り言は続くと思われた。意味はわからなかったが、もしかしたら兄は堯葵くんと賭けのようなものをしていたのかもしれない。だが兄はそこで空気を震わせるのを止めた。

「よし柚。これから堯葵が誘ってきたりすると思うけど、遊ぶ時は絶対俺にも言えよ」

「うん、分かった」

「邪魔しないとは、言っていないからな」

わしゃわしゃと人の頭をぐちゃぐちゃにした兄を、”もー！”と言いながら剥がす。もう目に寂しさは宿っていないくて、安堵した。兄の呟きの意味は分からないが今に始まったことではないので、いつも通りスルーする。

こうして、王子様と私は再会したのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897z/>

こえのおうじさま！

2012年1月9日22時47分発行